

鬼呪の刃

斗穹 佳泉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鬼滅の刃×終わりのセラフ要素の作品を探しても探してもなかつたので、思い付きで書き始めた作品。

産まれた頃から鬼が心に棲む少女は、愛に飢えていた。
何故母は愛してくれなかつたのか？父は産まれる前に出て行つたのか？
もう母はいない。

父に会うことができれば、なにかわかるだろうか？

目

次

第一話
第二話
第三話
第四話

第五話

第一回鬼呪ラヂヲ

31 28 20 14 7 1

第一話

私が四回目の誕生日を迎えた頃からだろうか。

母は私に暴力を振るうようになった。

最初こそ、暴言や無視というかわいいもので、しかしその数か月後には殴る蹴るが当たり前となっていた。

プライドの高かつた母は、父に捨てられたことを娘の私のせいだと思っていたのだろう。

私が産まれた年のひとつ前に、父は「仕事で数年ほど帰つてこれない」と言つたつきり、もう明日で六回目の誕生日になるが、帰つてきていない。

母は『柊家』という、代々占い術師を輩出してきた名家の分家筋だった。珍しく分家の中では占い術に素質があつたが、本家の人たちには遠く及ばずといったところで。

それもまた、娘への虐待に拍車をかけていたのだろう。

プライドの高さ故捨てられることもなく、周りに音などが聞こえない、地下に作られた部屋でただ虐待を受ける日々。

それは誕生日だろうが変わりない。

六回目の誕生日を迎えたその夜に、やはり母は私を何度も棒で叩き、蹴り、暴言の嵐を巻き起こす。

少女は身を小さくし、ただ痛みに耐えようとする。
そう、いつも通りに。

いたい、やめて、怖い、助けて、どうして?なんで私ばかり?

それは、私の心の声。

ボロボロになつてもまだ叫ぶ、心の声だ。

しかし六回目の誕生日を迎えた夜の心の声は、いつもの声ではなかつた。

『にやはは、すごい、すごい欲望だよ。愛されたい愛したい大切にしたいされたい逃げたい。ようやく心の壁を下げてくれた。それとも、無意識のうちに心が僕の侵入を拒んでいたのかな？でも、安心して。僕は君の欲望を喰らうことで、力を貸せる。僕が君の心を、君を、救つてあげる。ほら、僕に身を任せて？君には、この地獄を抜け出す権利があるんだよ。誰かに助けを求めてもいいんだよ。僕が助けてあげるから』

その瞬間、泣くことを諦めた私の眼は大きな零を零し、助けを諦めた心の壁は崩壊した。

その、いつも通りでない娘の姿を見た母は、より一層暴力を振るう。ずつと誰かに救つてほしかつた。

母から父から、人から、愛されたかつた。

身体が熱くなる。幼い小さな心臓は激しく脈打ち、母譲りの眼は朱色に染まつていく。

異変を感じ取つたのか、遂に母の暴力を振るう手が止まる。そして、分家とはいえそれなりの占い術を行使できる母は、一瞬で己が未来を悟つたのだろう。

「ゆ、許しておくれ！ゆるしておくれ！夜永^{よな}、どうか許しておくれ！」

そう言いながら土下座する母に、少女は自然とため息と乾いた笑いを吐く。

「あはは……母上。私はただ、愛されたかつた。父にも母にも愛されたかつた、愛したかつた。でも私には父上などいなかつた、母上だけだつた。……母上、父上を愛しておられなかつたのですか？父上との間にできた私を、愛してはくれなかつたのですか？」

「あ、あなたも、あの人も、愛していた！私は、私は愛していたのに！なのにあの——」

母の言い訳は途中から聞こえなくなつた。

刃が走る音が室内に響く。

いつのまにか私が手にしていたのは、暗い、昏い紅に光る刀。

ドクンドクンと脈打つような刀は、妙に手に馴染んだ。

次いで響いた音は、ゴトつという、重い音。そして、噴水のような水の音。

その様子を私は、ひどく客観的に、まるで誰かの眼を通しているよう見ていた。

『にやははっ、どう？ねえどう？楽しいでしょっ？すつきりしたでしょっ？自分を散々虐めてきた相手の頸を落とすのっ！愛など向けて、ただ自分しか愛してなかつた相手の頸を落とすのはっ！』

「あはは、ええ、そうね。だけど……だ、げど……どう、じて、こんなに、涙が出てぐるのかなあ……」

愛しい母だつたモノを抱えて、六つになつて初めての夜を、少女は泣き通した。

母を亡くしたあの夜のことを、今でも思い出す。

実際に母を失つたのは、もつと前だつたかもしぬないが。

「……おい、柊」

「……あ、ひやい!? な、なんでしたつけ? 富岡さん」

物思いに耽るのは私の悪い癖だ、しゃきつとしなきや。

今は水柱の富岡さんとの任務中である。これからは柱も連携して戦う機会があるかもしれないから、と最近は柱同士で任務にあたることが多くなっているのだ。

「出た」

「……え?! いや、あの、ですから、言葉が足りていないんですってば! なんですか出たつて! そんなんだから他の柱の人達から嫌われるんですよ? ええつと…… “鬼が北の山に出たから急いで向かうぞ” ですか?」

「……俺は嫌われていない」

富岡さんは一瞬、どうして俺の言つたことが理解できたのかと驚きの表情を見せたけど、すぐさま真顔になつて嫌われていることを否定した。

残念ながら嫌われているというか、距離を置かれているのは事実なんだけど、いつ気づくのでしょうかこの人は。

まつたく、もう何回目の合同任務だと思つているんですか。

仮にも私は占い術師を輩出してきた柊家だった者ですよ、人の表情や癖を見抜けないとでも?

『でも夜永はちよいちよいドジだから、人のこと言えないんじやない?』

「う、うるさいですよ『輝夜』!^{カガヤ}私はドジじゃありませんっ! ……あつ ゆつくりと横を見ると、富岡さんの可哀想なものを見る目と目が合う。

ま、またやつてしまつた……。

『輝夜』との対話は夜永の心の中で行われるため、傍から見れば、突然独り言を話しかけ始めたように見えるのだ。

「あ、いや、ええと、今のはですね富岡さん」

「……わかっている」

「絶対わかつてませんよね!? 何が “お前にもきつと何かあるのだろう。聞くのがまずいというのはわかつている”ですか!? 私何度も話しましたよねえ!」

そう、私は何度も柱の人達に私の心に棲む鬼『輝夜^{カガヤ}』について話しているのだ。

初めてそれを話した柱合会議の時の、柱全員からの可哀想な人を見る目ときたら！

その時十五の私が泣き崩れるのは仕方ないことですよね!?

それからというもの、私が独り言（輝夜との対話を口に出してしまったとき）を吐いてしまうと、「架空の人物を創らねば心がもたなかつたのだろう」と慈愛や可哀想な目が向けられるのが常となつている。

ちなみに、よく甘露寺さんにはカフエーに引っ張り回され、悲鳴嶼さんには常に念佛と言葉をかけてもらっている。

まつたくもう！なんでこんなことに……とは思いながらも、足を動かし翔ける。

六つの時に母を斬つて家を飛び出して以来、私の腰は黒い鞘を持つ刀を差している。

私がもういいよ、と念じたら消え、おいでと念じたら現れる刀であり、私の心に棲む鬼『輝夜』が私に貸してくれた力である。
魔術師でもないのに刀を出したり消したりすれば目立つからと、憲兵隊に絡まれそうな時以外は常に出しているのだ。

『いつそ魔術師^{まじしゃん}として名を挙げてもよかつたんじゃない？むしろその

方がお父さんを探しやすかつたと思うけどなあ』

『私、なんとなく鬼殺隊にいる方が父に会える気がするの。私に流れる柊家の血がそう言っているの。まあ根拠はないから勘だよりなんだけどねえ』

『夜永の勘は当たるからねえ。ま、とにかく今は任務でしょ？ 僕が力

貸そうか?』

『輝夜』は私の欲望を喰らつて力をくれる。欲望に忠実になればなるほど、その力は大きくなり、制御もまた効かなくなつていくのだが。『必要ないよ、今回は簡単な鬼だからね。それに、ほいほい『輝夜』に力借りるために欲望を浮かべてたら、乗っ取っちゃうでしょ?』

『もつちろん!・だつて夜永の欲望おいしいんだもんつ!まあでもその心配はあまりしなくてもいいと思うよ。君の心の壁は高くて分厚い。唯一崩壊したのはあの時だけで、それ以降崩れたことはないよ。そのおかげで僕はお預け状態継続だよまつたく』

あはは、と『輝夜』の文句を苦笑いでかわし、さすがに意識を集中する。

もう結構な距離を走つてきている。

そろそろ鬼が現れてもいい頃だろう。

ふうー、と呼吸を整える。

全集中・常中は普段行つている。

私がこれから行う呼吸は、私オリジナルだ。

「さあてじゃ、始めましょうか。『鬼の呼吸・全集中・戦中』!』

第二話

「ちよつと！聞いているんですか富岡さん！なんのための合同任務だと思つてゐるんですか！」

「……大丈夫だ」

「“俺が単独行動したせいで罰が下るような事があれば、俺だけに罰を与えるよう頼むから大丈夫だ”？寝ぼけてるんですかあなたはつ！？急にいなくなつたから、鬼の血鬼術にはまつたのかと思つて構えてたんですよ！？」

「……聞いたことないな」

「だ！か！ら！ちゃんと思つてること全部声に出してくださいよ!?そんな血鬼術を持つた鬼の話をしているわけじゃないんですよ話をすり替えないでください！ていうか鬼はちゃんと倒したんでしょうね！?」

ズレしている会話にイライラを覚えながらも、夜永^{よな}は早口で捲し立てる。

『全集中・戦中』はちよつと疲れるんですよ！?

胡蝶さんほどではないけど非力の私が頸を斬るにはこれしなきやいけないんですよ！?

まったく、富岡さんが単独行動して鬼を倒したなんで。

なんでこう、この人は独りで突つ走りたがるんでしようか。

「……ああ、問題ない」

「……今、富岡さんの言つていることが読み取れませんでした。今回は裏に潜む言葉はないということなのかな」

富岡さんの言葉の奥を読み取れない、ということは、たまにあることだ。

微妙に表情が読めなかつたり、声音が変にブレていたりしてよくわからぬときがある。

これまでの経験からすると、言葉に裏がない、本当にただそれだけをしゃべつてゐるのだろう。

一瞬富岡さんはビクッと体を震わせた気がしたけど、気のせいだろ

う。

この時、富岡が単独行動していたときに何をしていたかを夜永が知るのは、それから二年と少し経つてからだつたりする。

柊 夜永。俺はこの娘が不思議でならない。十六にして柱となつたからには、腕は確かであり、それも間近で何度も見てきた。

時折、というか毎回俺が話したことに対し適切に言葉を補足しては反応を返してくれる観察眼には驚かされるばかりだ。

可哀想な一面（独り言）もあり、より一層彼女を不思議と表現せざるを得ない。

彼女の羽織も独特だ。甘露寺や胡蝶のような細かい作りがなされているのもではなく、黄色の生地に赤い彼岸花と白い彼岸花というシンプルなもの。

暗い紫ではなく、明るい紫の髪を腰付近まで伸ばし、朱色に染まつた瞳には、おぞましい何かを感じる。普段柱や隊士と話すときはゆらりとした口調や態度で、そんなおぞましさなど感じるはずもないのだが……。肌が常人に比べ白いからだろうか？

鬼滅隊士の中でも美人、と呼ばれる部類に入るのだろう。甘露寺のそれとはまた違う方向性だとは思うが。

未だにわーきやー叫ぶ年下の同僚を横目に、富岡はそんなことを考えていた。

そこへ五月蠅く鳴きながら、鴉が舞い降りる。

「カカラア！ 東イ！ こより三つ先の街で人が惨殺される事件アリイ！ 鬼柱・柊夜永は直ちに向かうべし！ 水柱・富岡義勇は報告のため帰投すべし！」

カカラアカカラア喚く鴉にうんざりしながらも、わかつたとばかりに顔を震めながら夜永は手を出すと、鴉はふわっと手に停まる。

一般的な鴉の黒に比べて赤黒い羽を持つこの子は、『輝夜^{カガヤ}』の刀を似てて愛着が湧くのだが、頭に響くこの鳴き声はどうにかならないもの

だろうか……。

「それじゃあ、私は新しい任務に向かいますね。お館様への報告はよろしくお願ひします」

「……わかつた。気をつけ……行つてしまつたか」

夜永は、富岡のわかつたの部分だけ聞いて、東へ走り出す。

途中の街で休憩を挟み、馬車で一日の距離を四刻で走り切る。その距離をその速さで駆け抜けたにも関わらず、夜永の息は上がつていなかつた。

『んく、やつぱりおかしいんだよなあ。ねえ夜永、君つて普通の人間？つて聞きたくなるタイミングが今までいくらかあつたんだけど。さすがにこれだけあの速さで走つて息が上がりないのはおかしいでしょ』

「んく、そうなのかなあ？そういう体質なのかもよ？甘露寺さんみたいな。それか、私つて稀血なんでしょう？それのせいかも」

確かに彼女は稀血であり、軽い傷ならすぐに閉じて気づいた頃には綺麗になくなってしまう、という特殊体質である。

その体質故に、虐待を受けても傷が塞がるばかりで、誰にも助けられず、信じてもらえず、助けを求めることができなかつたのだから。

その体質も『輝夜』が心に棲んでいるからなつたのではなく。

『輝夜』曰く、遺伝性のものらしい。

母は占い術の家系だ、そんな体質ではなかつた。

……では、父が？

という風に、自分と母に関するこつとを突き詰めていくと、必ず父にぶつあたる。

だからこそ、夜永は父を探しているのだ。

『（体質、ね。治りが早すぎることは置いておいても、夜永のオリジナルと言つていい『鬼の呼吸』も本当は、僕が夜永の心に棲んでいるからできた訳じやない。あれは稀血であることを考慮しても、人ができる呼吸法じやない）』

そんな心に棲まう鬼の内心など知る由もなく、ゆらりゆらりと夜永が足を進めていると、件の家に着く。

未だに血の跡がくつきりと残る現場に、思わず顔をしかめる。血のにおいも、まだどんより残っていた。

「うつ……やっぱり人の血のにおいは慣れないなあ。気分が悪くなつちやうし、身体が変に熱くなつちやう」

懐から布を取り出しマスクの代わりにする。

さすがに死体は憲兵によつて片付けられているためここにはないが、血の飛び散り方からその鬼の戦闘スタイルを知れる。

「……爪、かな？これ。……ん？このにおい、どこかで嗅いだことあるかも。どこだつたかな……？」

ふと鼻をついたにおいを脳内で検索するも、結果は芳しくない。ともかく、ここですることはもう終わつた。あとは街を歩き回つたりして情報収集するしかない。

んく、なんとなく西から回ろうかな。

と、いうことで聞き込みを初めてはや半刻後、甘味屋を発見。甘いにおいつられてきゆると胃が音を鳴らす。一時歩き回るのは中断しよう。お腹が空いてはなんとやらというやつである。

好物のみたらし団子、三色団子と抹茶を注文し、少し休憩することにした。ついでに情報収集も忘れない。

「最近、この街で何かあつたつて聞いたんですけど、何があつたのか知つてますか？」

「お嬢さんは知らないのかい？この辺では中の良い夫婦で有名だつた夫妻の妻の方が一昨日、死体で発見されたんだつて。しかし出稼ぎに出てる夫は可哀想にねえ。ついこの間、仕事で何年か帰れないと言つてたからねえ」

甘味屋のおばちゃんの話を聞いた瞬間、夜永の身体がビクツと反応を示す。

いやいや、落ち着こう私。そんな、数年出稼ぎに行く夫なんてこの時代当たり前。そうだよ、何を慌てるんだ私。

私情を抑え、ひとまず頭の中に入メモをする。夫がいると聞いて真っ先に浮かんだのは、夫が鬼になり妻を襲つたという推測だが、少し前に街を離れているならその可能性は低い。

「その夫の方について教えていただくことつて出来ますか？」

「ええいいわよ。肌はかなり白い人だつたわね。そういえば、お嬢さんも肌は普通の人比べて白いわね、いいところのお嬢様だつたりするのかしら？」

「そ、そんなところです……ちょっと色々あつてですね、お察しください」

「あら、失礼なことを聞いちゃつたわね……。身長はあつたから筋肉はそれなりについていたんだろうけど、肉体労働はしてなさそうだったわ。あのやわらかい笑顔と来たら、私でさえ惚れてしまいそうだったよ。そういうえばいつもシャキツとした洋服を着ていたね。ああそれと、可哀想なことに、子宝には恵まれなかつたようでね。妻の方がうちの常連さんだつたから、相談にのつたりしたこともあつたね」

他はそうだねえ、そうそう、一人でうちの和菓子を食べに来てくれた時はね、とこれ以上は思い出話になりそうだつたのでそそくさ団子とお茶を頂いた。

任務とは関係なさそつたが、私にとつて重要な情報だつた。私の父と同じ様な境遇にあつた人の情報。あまりにも、私の父の当時の状況に似ている。そして私の肌のように、その夫の肌は白いと言う。こんな偶然があるだろうか？

仮に私となんの関係がなかつたとしても、父につながるかもしけない情報だ。

情報はしつかりと彼女の頭の中に、重要事項としてメモされた。

「ごちそうさまでした」と甘味屋を出る。なんだかんだ美味しくて、おかわりを三回ほど話の中でしていたのは内緒のお話。

父に近づくための情報が偶然手に入つたので心はウキウキだつが、まだ父のこととは決まっていないと自分を戒め、任務中であることを思い出し気を引き締める。

その後聞き込みを続けても、結果的に鬼に関係するような情報は得られなかつた。

夫の方は先ほど話に出たように、少し前からこの街を離れているため、夫が鬼になり妻を殺したとは考えにくい。

となると、やはり野良の鬼ということになるのだが、ただの野良鬼が人間一人だけを襲うだろうか？

しかも、食べる訳ではない。それなのに、殺しをする必要があつたのか？

「とにかく、向かうは西かなあ。来た道になつちやうけど」

鬼は太陽光を受けると灰になつてしまふため、無意識下、本能的に西に足を運ぶことが報告されている。

今回みたいに野良鬼が関わっていると疑われるときには、西を調査するのが基本となつていた。

「富岡さんとの任務ですごい肩透かしを受けたから、今回こそは鬼を相手にするよ！まだ二日しかたつていらないなら、見つけるのは簡単だろうからねつ」

もうすぐ陽が沈む。これからが鬼が活動し始める時間帯だ。

鬼殺の字が刻まれた隊服の上に着た彼岸花の羽織を翻して、少女は早足で街道を通り抜けていった。

時は少し遡り、事件の当日。

件の家の中で、今し方殺した女を見下ろして、一人の男が苛立ちを含めた声を吐きだした。

「今回も子は為せなかつたか。やはり稀血と私の鬼の血は相容れない性質なのだろうか？」

今より十年と少し前にも同じ実験を行つたが、今回も同じ結果に終わつてしまつた。

前回は、妻が夫である私から愛情を感じきれなかつたからなのではいかと推測し、今回はそならぬ様振舞つてきたが。

「やはり段階がまだだつたか。しかし、一般の民の子が鬼の血の力に耐えられるとは考えにくい。こちらから先に実験すべきか」

真つ白な肌に紅い目をした男は憎々しげに妻だつたものを見る。前回の時もこうして始末するつもりが、当時は野良鬼が付近で暴れまわつたおかげで、鬼殺隊がぞろぞろと付近に集まつていたため、面倒を避けるため殺さなかつたのだ。

実験をする以上、下調べは入念に行つてゐる。プライドの高いあの^{人間なら}何も漏らすまいという確証があつたという理由もあるが。こ^こら一帯の野良鬼は予め排除しておいたため、邪魔される等といふことはない。

「とはいゝ、この街では姿を見せすぎた。次は時間を空け遠い街で探そう。鳴女」

そう彼が呟くと、琵琶の澄んだ音が、一音響く。

次の瞬間には、男の姿は跡形もなく家から消えていた。

第三話

「お疲れ様だつたね、義勇。報告ありがとうございます」

「……それでは、失礼します」

お館様に報告を終えた富岡は、一礼して産屋敷邸を去る。

その様子を耀哉は見送った後、東北の空を見た。

「鬼となつても、人を、家族を喰らわなかつた鬼、か。鬼殺隊に入隊で
きれば、産屋敷家が残してきた記録上二四目……いや、二人目の鬼に
なるだろうね」

そう呟いて、記憶している数多の書物の中の一冊を、頭の中の図書
館から引き抜く。

記録によると今より昔、鈴鹿午前という鬼女と、ある鬼殺隊士が恋
に落ちたということがあつたそうだ。

二人はめでたく、とはいからずとも結ばれた。当然、最初はその隊士
と、特に鬼の鈴鹿午前は他の隊士達から受け入れられなかつた。

鈴鹿午前はそれまで人を喰つていたのだから、当然の反応だつただ
ろう。何度も何度も隊士は、仲間達に彼女は安全であると訴えたが、
聞く耳を持たれなかつた。

しかしその中でも、隊士は妻と共に多くの任務を生き抜いてきた。
ついには柱の地位まで与えられるようになり、隊士は炎の呼吸を独
自派生させた愛の呼吸を使う愛柱に。鈴鹿午前は鬼の力をより強力
なものにする鬼の呼吸を作り出し、鬼柱となつた。

二人の間には子供も産まれ、幸せの真っ只中にいたそつだ。

しかしある時事件が起つた。

その事件により鬼柱の鈴鹿午前は鬼殺隊からの信用を失い、討伐さ
れることになる。

妻と子供のために命を投げ打つて、愛柱は一人鬼殺隊に対抗した。

愛柱の抵抗の結果、鬼柱・鈴鹿午前並びに彼女らの子供たちは姿を
消し、愛柱は他の柱たちとの戦いの末、呼吸の乱用による心臓、肺破

裂により死亡。

炎柱と鳴柱は引退せざるを得ない傷を負い、水柱と岩柱は全治二ヵ月の負傷を負った。

愛柱は愛に狂い、愛のためにその命を燃やした。

今となつては、産屋敷家当主のみが知る話である。

「蜜璃のはおそらく先祖返りだろうね。ただどうしても、夜永がわからぬ」

恋の呼吸や怪力は、努力や先祖返りで説明がつく。だがしかし、鬼の呼吸は鬼が編み出した呼吸法であり、人間には到底扱えるものではないはずだ。

「彼女はどう遡つても、鬼とは関係のない家系だ。心に鬼が棲んでいるというのは、鬼の呼吸を使えることと関係がありそうだが……。しかし問題は、何故心に鬼が棲んでいるのか。その鬼は何故夜永に力を貸しているのか。何故父親の所在は不明なのか……」

フフッと耀哉は笑みを零す。

鬼舞辻の情報を探してはいるが見つけきれていない今、謎解きは彼の楽しみの一つであった。

日が沈んで少しした頃。

鬼の痕跡を求めて西へ走つた夜永は、鈴虫の鳴き声が響く暗い林を歩いていた。

もう林に入つてから半刻程歩いただろうか、さすがに無言に飽きてきた夜永は、警戒心を解くことなく話し始めた。

「ねえ『輝夜』はさ、私の父ってどんな人だと思う?」

『さあ?僕には親とかいないからなあ。気づいたときには君の心の中にいたからね』

そつかあ、と『輝夜』^{カガヤ}の言葉に頷く。

……いやいや、どんな人なんだろうねって意見を求めたのに。考えるのをめんどくさがったのか。

『それはそう……き……け……うが……い。……が……る』

「え?なんて言つたの『輝夜』?声がはつきり聞こえなくなるなんてこと今までなかつたんだけど……」

鈴虫の奏てるハーモニーにも飽きてきているのだから、話し相手がほしかつたのだけど……。

珍しいこともあるものだね。まあ『輝夜』^{カガヤ}には聞こえていると思うから、独り言(おしゃべり)は続けるんだけどさ。

「それはそうと、昔から思つてたけど私の血つて不思議よね。体外に出て少しだらすぐ固まっちゃう。こんな風に」

腰に差した紅昏い刀を引き抜き、左手首に当てながら引く。

傷から大量の血が流れだし、流れ出た血はすぐ固まっていく。

傷はみるみるうちに小さくなつていき、数分もすると消えてなくなつた。

あはは、ふしぎいと思うだけで、痛みや自分を傷つけた行動に疑問は感じなかつた。

しかしふと、頭の中に、ある疑問が湧いた。

「あはは、ねえ『輝夜』^{カガヤ}。心臓をサクつと貫いたら、いつたいどんな音が鳴るんだろうね?」

刀がドクツドクツと拒否するように脈打ちだす。

そんなことは気にする留めずに夜永は自分の心臓を刀で貫いた。

「……かぶつ」

そんな可愛らしい音が夜永の喉から漏れる。

意識が薄れ、視界がぼやけていく彼女は、想像より可愛い音だった、と感じていた。

「やはり、血鬼術は直接人間にではなく、間接的に人間に作用するものに限る。他の十二鬼月は直接的なものが多すぎるのだ」

他の鬼へ溜め息を吐きながら、林の奥から右眼に下弦參と刻まれている男が出てくる。

その男が指をパチンと鳴らすと、林中の鈴虫の鳴き声がピタリと止む。

鈴虫は血鬼術によつて創られたものであり、その鳴き声には睡眠作用があつた。

ある一定時間音を期させた相手の思考に干渉する血鬼術であり、夜永に自身の体質と血の特殊性についての疑問、それに付隨し強烈な探求心を植え付けたのだ。

どこまでなら回復できるのか？どこまでなら傷つけてもいいのか？どこまで？どこまで？どこまで？傷をつけた時の音や、体の調子はどうなるのか？どうなるの？どうなるの？どうなるの？

その結果が心臓を自らの刀で一突き、である。

「無惨様のおっしゃる通りにここで待つっていた甲斐があつた。雰囲気が一般隊士のそれではない。柱などの階級が高い者だろう。さて、死体は持ち帰りゆっくり喰うか」

その鬼は血鬼術からもわかるように、慎重な性格の持ち主であつた。きちんと刀が心臓を貫いていることを今一度確認し、死体を担ごうと近づく。

しかし、ドサツという音と共に突然世界が回転する。

男の視界は先ほど足元にあつた雑草で覆われていた。

「……？私は、転んだのか？」

まったく、私も詰めが甘いと反省し、起き上がるうとするも、手が動かない。いや、てだけではない。身体が動かないのだ。

「がはつ、がはつ、……はあ。つたく、肺に血が入つたらどうしてくれ

る。運動能力低下じやすまねえぞ。俺のモノに何してくれてんだ、お前』

その鬼の視界の端で、ゴボツと血を盛大に吐きながら、『手に刀を持つた夜永』は立ち上がった。彼岸花の羽織は朱く染まり、瞳を真つ赤に染めながら、彼女は鬼を睨む。

「お前、いつの間に?!いや、確かに心臓を貫いているのは確認した!何故鬼でもない、唯の人間のお前が生きている!?」

有り得ないことを目撃した鬼の眼が大きく見開かれる。

何時如何なる時も慎重さに重きを置いていた鬼は、これまで安全に人間を喰らってきた。自分の血鬼術ならリスクなど払わなくとも、ご飯は自らの手で死んでいってくれるのだから。

とはいって、今や頸だけになつたこの鬼も、下弦の参、十二鬼月である。その身体能力も下級の鬼とは比べるまでもない。いくら死体と思つていたからといえ、こんなにあつさりと、気づく間もなく頸を落とせるだろうか?

そんな“有り得ない現象”を体験した鬼は、先の様に叫ぶのも無理はなかつた。

その鬼を睨みながら、淡々と『夜永^{カガヤ}』は答えた。

「なんでつて、俺が鬼だからに決まつてんだろ。寝ぼけてんのか?下弦の鬼なんてやはりこの程度か。以前夜永が戦つた下弦陸の方が余程マシだつた。……“いい加減死ねよ”。俺は気が立つてんだ。お前のせいだな」

強く、『夜永^{カガヤ}』から吐かれた死ねの言葉に、下弦の參は恐怖し、身体の感覚はないのに背筋が凍り付く感覚を覚える。

この感じは、この恐れは、まるで、あの方のようではないか、と。塵になりながら、鬼は最期の瞬間まで恐怖を覚えたまま消えていった。

「……はあ、つたく、無茶しやがつて。無意識的に心の壁を厚くして心の防御力を上げたつもりかこの身体は。あの鬼は精神、頭に干渉して

くるタイプだったから、俺の言葉が届かなくなつた瞬間冷や汗出た
ぞ」

心の中で氣絶している夜永に輝夜は溜め息を吐く。

心臓はまだまだ本調子には程遠い。

こんな状態で体を明け渡せば、忽ち夜永は倒れてしまうだろう。

そんな、妹を想う兄のような思考を巡らせていると、手に力が入ら
なくなつていてことに気づく。

「刀を振るうの速すぎたか。あんまり鬼の力で治癒するのも、体力を
消耗しすぎるから不味いか」

刀を鞘ごと消し、もう一度しつかりと羽織を着なおして、帰路に着
いた。

次の日の朝。

アオイが屋敷の門を開けると、そこに真っ赤に染まつた彼岸花の羽
織を着た人物が倒れていたそつな。

第四話

「……あれ、知つてる天井だ。……これすぐ不味くない？またお説教を受けなきやじやない？」

目覚めてからの開口一番これである。

そもそもそと布団から起き上がりろうとするも、右手が何故か動かないため、苦戦する。

なんとか起き上がり布団を捲つて見えた自分の惨状に、わあお、と驚きの声を上げてしまった。

右腕は包帯で覆われ、若干きつく巻かれた胸元の包帯。

右手が動かない理由は包帯のせいではなく、本当に動かない、ということがなんとなくわかつた。

自分の身体を確認した後、夜永^{よな}はこれから起ころる事に溜め息を吐き、その時を待つた。

ちなみに事というのは、ドツタドツタ足音を響かせながら近づいてくる同期の彼女からの、お説教だ。

「夜永！起きたんですね！一体何があつたんですか!?朝、門を開けたら夜永が血塗れで倒れているのを発見した私の気持ちわかります!?ええわかりませんよね！以前も一回ありましたよね門の前で血塗れで倒れてるの！あの時は心臓が口から飛び出るかと思つたんですけど!?なんでまた同じ体験させるんですか!!」

障子を突き破らんばかりの勢いで入ってきた彼女に抱きしめられながら夜永は、あー、これ今回はどうやって切り抜けようと思いつつその後もお説教を受け続けた。

四半刻ほどお説教が続いた後、ようやくしゃべることを許された夜永は、これまでの経緯を布団の隣に座るアオイに覚えている分話し始める。

「えと、あのですね、アオイさん。かくかくしかじかで、今この状態です」

「あのですね、夜永さん。かくかくしかじかでこれまでの経緯が伝わ

るのはお話しの中だけですからね。じっくりお話を聞きましょうか」

呆れた眼でお説教主の彼女、アオイは、包帯だらけで布団に寝かせた同期を見る。

こうして夜永の手当てをするのはもう何回目だろう。

最終選別で夜永が私を庇つた時の傷を手当てしたのが最初だったかな。

……最近は怪我の度合いがすごいことになってきているけど。

夜永のせいでも私の医術力がだいぶ上がってきて、蝶屋敷での治療を任せられることもしばしば。さすがに内臓のことまでは、まだよくわからないうけど、外傷なら一人でもなんとかできるようになつた。

今回、特にひどいのは右腕だ。脆い木の棒を思いつきり振り抜き、急に止めると勢いで棒は折れて吹っ飛んでいつてしまう。夜永の腕はそんな棒のような状況だつた。繋がっているのが不思議なくらいの怪我の仕方だ。一体何があつたんだろう、こんな怪我をするなんて……。

心臓はしのぶ様に診てもらつたところ動きが鈍っているらしく、激しい運動をすると血液が身体に回らなくなり、即ぶつ倒れるから動かさないようにと言われてますし。

不思議なくらい早く傷が治る夜永の身体といえども、無理はさせられない。

今日はやめにしどきますか、と一つ息を吐き、アオイは今の夜永の容態を伝える。

「……いえ、詳しく述べるのはまた今度にしておきましょう。大体把握していると思いますが、右腕は、そうですね、一ヶ月は安静にしておくように。いいですか？絶対安静ですかね？破つたら薬湯たらふく飲ませるので。それと、しのぶさんからですが、心臓の動きが鈍いらしのので、激しい運動は控えるようにとのことです。それでは、私は別の仕事があるので」

アオイはそう言うと立ち上がり障子に手をかける。

ふと振り返り、

「……またね、早く元気になつてね。無事でよかつた、おかえり」
さつきまでの怒った表情とは全然違う、やわらかい笑顔でアオイは
親友に言つた。

「うん。ただいま」

その親友の笑顔に夜永も笑顔で返す。

トツトツトと、先程より軽い足音を響かせて、彼女は仕事へと戻つ
ていつた。

お説教が終わると、いつもおかえりを言つてくれる。

家族がいたらこんな感じだつたんだろうなあと想いながら、親友の
可愛い場面を見れてつい頬がゆるんでしまう。

「アオイは心配性ですものね。でもあの娘、あなたのおかげで良い医
術師になりつつあるんですよ。今やネガティヴな思考もどこへやら
です」

「そうですね。いつも私は助けてもらつてばっかり……!? 気配消して
部屋に入つてこないでください胡蝶さん！ びっくりするじゃないで
すか！」

いつの間にか部屋にいた彼女に、夜永は驚きの声をあげる。

驚きで心臓が痛くなつたのはまた別のお話である。

彼女は、無事で良かつたです、と笑みを零し、わざとらしく「あれ
れ〜？」と付け加えてすつとぼけた。

「胡蝶さん？ 誰ですかその怪我人の部屋に気配を消して侵入する非常
識な方は」

「あなたのことなんですが、胡ちよ、あ、えと、しのぶさん」

「しのぶさん？ また知らない名前ですねえ」

「……しのぶ姉さん」

端から見ると、この上なくめんどくさい部類に入るであろう会話の
相手は、蝶屋敷の持ち主である胡蝶力ナエの妹、胡蝶しのぶである。

年が一個上のこの人は、何かと私といふときお姉ちゃんぶる。

ちなみに力ナエとは全然違う接し方で、私に対してだけめんどく

……失礼、かまつてちやんなのだ。

もちろん、これにお返しするのが私の日課でもあるのだけど。

ほら、あれだね。普段奥手な姉のために、甘露寺さんではないけど恋路を応援してあげなくちやねつ。

というか、姉さんが私の身体診断したくせに驚かせるのはどうな よ。

「しのぶ姉さん、いつになつたら富岡さんに告白するんですか？」

夜永が言つた瞬間、空気が変わる。

ピシッと凍りついた笑みを浮かべて、しのぶは全集中・常中のまま息を深く吸うと

「あは、何を言つてるんですか妹といえどそういう発言は看過できませんね何を根拠に私が富岡さん好いているなんて言つてているんでしようねこの娘は私は別にあの嫌われ体质なのに嫌われていなければ言い張る富岡さんの姿を可愛いだなんて思つてませんよ口下手なのは自分がしゃべると空気を壊してしまうだろうからという配慮からくるものだとどうして私が理解できると思うんですかしかも実は動物が好きとか言うギャップに萌えたなんて思つてるわけないじやないですかしかも一番好きなのは兎ですよ兎富岡さんが兎つてもう可愛い以外表現の仕方ないですよねこの前富岡さんの後をこつそりと尾けていたら笑顔で兎撫でてたんですよその時キヤメラがあつたら絶対写真に残していたのにあの富岡さんの笑顔なんて見る機会ほとんどのないのに！」

などと申しております、同士『輝夜^{カガヤ}』。

『なるほど、ラブコメ送りだ』

表情の一切を凍りつかせて一息で義勇への想いをぶちまけるしひぶ。

彼女は普段から富岡にドジだの天然だの物申していたが、当の本人もこれである。

普段の奥手な姿は何なのかという疑問で夜永は今一度頭を悩ませ

る。

いつものように飄々と富岡さんにくつつき、一言告げるだけで簡単に落ちそなものなのに。

それはさておき、と。

「心臓、どれくらいでよくなりそうなの？」

そう聞くと、しのぶ姉さんの顔は凍りついた笑みを崩し、医者の顔になつて、眞面目に話しだす。

「そうですね、はつきりとはわからないけど、一ヶ月は診た方がいいわ。右手と同様に絶対安静ですからね。運動しているとこを見かけたら、私特製の『栄養ドリンク』を飲ませるので、そのつもりで」「し、しのぶ姉さん特製の栄養ドリンク……。気をつけさせていただきます」

若干青褪めながら夜永はしのぶの『命令』に頷いた。

しのぶ姉さんの薬湯はただでさえ苦く嫌な味なのに、それの遙か上位互換の様な物など飲めるわけがない。しかも、姉さん特製という言葉、絶対いけないやつだ。

療養期間中、夜永^{よな}は決して運動はしまいと心に誓つた。

しのぶが去つた後夜永は、やはりしのぶさんの相手は疲れる、と布団に倒れ込み独り言を吐き始める。

『輝夜^{カガヤ}』、ありがと。あなたがいなかつたら危なかつたんでしょう？助けてくれてありがと』

『まったく、君の精神と心が切り離されている状態はどうにかならないものかな。夜永の悪いとこだよそれ。それに君が注意を怠つた結果、危うく右t、じやなかつた、肺に血が大量に入つて運動能力低下するところだつたぞ』

ありがとうに文句で返す鬼に思わず苦笑を漏らす。

……ん？今右手つて

夜永の思考を遮るように『輝夜』は続けた。

『心臓を完璧に治してもよかつたんだけど、それすると体力がなくなつて一ヶ月はあの林で寝てたからな。夜永は欲望も喰えないから力も出せないし。それでなんとか動けるまで回復させて、屋敷まで来

た』

「うん、それはそうと、さつき右手つて

「右手は絶対安静ですよ？」

「そりやもちろんわかってるけど……え？」

自然に会話に入ってきたその声は心の中からではなく、障子からひよこつと顔だけだして微笑む彼女から発せられたものだつた。大人びた座敷童みたいだと思つたのはここだけのお話し。

「あらあら、しのぶが嬉しそうに歩いていたと思つたら、夜永起きていたのね。無事で良かつたわ。また心の鬼と話していたの？」

「心配おかげしました、カナエさん。この通り、もう大丈夫です。カナエさんは鬼と仲良くするのが夢ですもんね。正直、一人でも信じてくれる人がいてくれて嬉しいです」

言葉とともに苦笑いをこぼす。

今日は何回苦笑いをするのだろう。

苦笑いカウンターとか設置してみようか。

その考えにもやはり、苦笑いをした。

そんな苦笑いを繰り返す私を見て、無理をしていると思つたのか、カナエは微笑むと

「ごめんなさいね、夜永。まだ本調子には程遠いだろうに、押しかけてきて。ゆっくり話すのはまた今度にするわ」

そう言つてカナエは部屋を出ていった。

その足取りは非常に軽く、鼻歌まで聞こえてきそうだつた。

これでゆっくり、とわいかず、カナエと入れ替わりでカナヲが部屋に入つてくる。

もしかして今日はお見舞いパレードの日なのかもしれない。

……何言つてんだ私。

「やつほ、カナヲ。元気してた？」

右手をあげようとして動かせないんだつたと思い出し、左手を上げて挨拶をした。

相も変わらずコクンと頷き、もじもじと声を出そうとしては引っ込

めるカナヲを、可愛いなあなんて思いながら言葉を待つ。

私に家族がいて、妹がいたならば、こんな感じだつたのかな、なんて思つてみたりもする。

「……え、えと、だいじょうぶ？」

「うん、もう大丈夫だよ。まあ右手はこれだけね。そうだ、胸元の包帯巻き直してくれるかな？ アオイ、私の方が大きいからつてきつく巻いてあるの」

「ふふつ、わかつた」

クスリと笑い、カナヲは服を脱がすのを手伝う。

十三の彼女にとつて女の嫉妬などまだわかるわけもない。

それからなんだかんだ話をしていると、遠くからカナエさんがカナヲを呼ぶ声が聞こえてくる。

カナヲはハツとした表情を見せると、次の瞬間には顔をダラダラと汗が流れ始める。

……修行を抜け出して来てくれたんだね。

「ありがと、カナヲ。もう大丈夫だから、行つておいで」

コクンコクンと二回頷き、カナヲは脱兎のごとく部屋を後にした。

今剣術をカナエさんに教わつてるんだつけ。

二年後にはカナヲも入隊試験を受ける予定となつてゐるため、それの修行を今行つているのだ。

呼吸は普段からそれとなく胡蝶姉妹が教えていたのか、ひどく荒いが、一応常中は出来始めてる。

最終試験も余裕で突破するだろう。

さて次は可愛子三姉妹かな？

とは思つてみたものの、今日はそれ以降来客はなかつた。

あの三人のことだ、何人も押しかけて疲れさせていると思つて遠慮しているのだろう。

そしてそれはいつもなら遠慮しなくていいよとか言うのだが、さすがに疲れはまだまだ身体に残つてゐるようで、天井をただ見上げているだけで視界がぼやけてきた。

今日はアオイに説教され、しぶさんに惚氣話聞かされて、カナエさんやカナヲと談笑して……あれ、なんか怪我人のスケジュールじゃないよ？

しかし、何か忘れているような……まあいつか。

夜永はそのまま意識を手放す。

心の中で『輝夜』が、「なんとかなつた」とか安心しているのは、別のお話しである。

ちなみに後日、可愛子三姉妹は私の大好きな和菓子とお茶セットを持ってお見舞いに来てくれた。

第一回 鬼呪ラヂヲ

夜「はい、ということで始まりました、鬼呪ラヂヲ！ここでは私夜永と」

輝『僕輝夜が、メインパーソナリティとしてこの作品『鬼呪の刃』について話を進めていくぞ。まず最初に、夜永の境遇についてだな』夜「そうだね。私の過去について、「え、そんな親殺すまでだつたかその過去？」って感じた人もいるだろうから」

輝『夜永は四歳から虐待が始まつたと言つていたけど、僕が憶えてる範囲だと、二歳くらいからかな。夜永の父親からなんの音沙汰もなかつたから、母親は薄々感づいていたのかもしれない。出血によつて死ぬこともないし、次の日には傷が塞がつているのだから、毎日がサンドバックだつたからな』

夜「え!? そんな前からだつたの？ 気づかなかつたな」

輝『気づかなかつたつていうか、その時は夜永が心に頑丈な壁を作つていたからだよ。壁が綻び始めたのが四歳くらいからだつたからな。君は閉心術においては神憑つた才能持つてるからね。柊の血筋に感謝しなよまつたく』

夜「確かに、才能には感謝感謝だよ。仮に私にその才能なかつたらどうなつてたの？」

輝『あの誕生日の日に、周りの人間を殺して回つたかな。さすがに幼児の体だと不便だからね。で、その後色々あつて鬼殺隊の敵になつてただろうね』

夜「怖くないそれ!? 胡蝶さんとか富岡さんとかの相手になつてたわけでしょ!? 怖すぎだよ！」

輝き『……いや、夜永、君柱の中でも十分強い方だからからね？ まだ鬼の呼吸の型とか一個も出てないから想像しづらいだらうけど』

夜「そう、それ！ もう四話なのに型一個も出してないの私！ 全集中・戦中だけだよ出したの！ しかも空振つたし！ 富岡さんのせいだ！」

輝『補足しておくと、全集中・戦中は、アドレナリンを一定量強制分泌させる呼吸法だ。夜永は一般隊士の頃から訓練して、今では半刻

くらいなら使えるぞ。その後かなりの疲労感が襲つてくるけどな』

夜「最初は倒れまくったからね、私。六十数えるくらいしか使つてないのに、一刻本氣の本氣で走らされ続けた感じの疲労感だつたよ。でもこれしないと、鬼の頸斬れないからなあ、私の力じや』

輝『胡蝶妹と同じで、体格が良い訛じやないからな。まあ、他の柱や隊士達に』氣の呼吸として振る舞う分には』

夜「はいストオツブ！まだ！まだだからそれ！これまでの話に出てないんだから私達は触れられないはずだから！』

輝『あ、うつかりしてた。てへペろ☆』

輝『……それ、輝夜の見かけが男の娘だから許されるけど、ごつつい鬼だつたら許されないからね？終わセラのアシエラみたいな見かけだから許されるんだよ』

輝『こういうところでちやつかり僕の見かけ説明するのやめてくれないかなあ？まだ本編出てないんだけど』

夜「……てへペろ☆』

輝『あー、はいはい可愛いよさすが夜永』

夜「返しが適當だよ！』

輝『次は鬼殺隊にどの様に関わりを持つたか、だな。端的に言うと、お館様にスカウトされたからだ』

夜「そうそう、悲鳴嶼さんと同じでね。これは後々本編で書くかもしれないから詳しくは言えないけど』

輝『そうだな、六つの時に柊家を飛び出してから、十三でお館様に拾われるまでの話は書く気力があればいつか出されるだろうし』

夜「そうだね。かくかくしかじかあつてお館様にスカウトされ、鬼殺隊に入隊することになつたんだ。十五の時に最終選別をクリアして、十六になつたばかりの頃、下弦の鬼を倒して、鬼柱になるの』

輝『ああ、あの時の鬼か。この前の鬼よりは強かつた。初めて夜永が大怪我して、蝶屋敷の世話をになつたからな』

夜「あの時のアオイは怖かつたよ……。怪我してたのに一刻は正座でお説教だったからね』

輝『それだけ愛されてるつてことじゃないのか？大切に思われてるんだよ』

夜「……愛、ねえ。そりやアオイも胡蝶さん達も大切に思つてる。悪い人じやないつていうのもわかつてゐるんだけど、よくわかんない。信じてない訳じやないんだけどね」

輝『うわ、めんどくさ（愛を知らずに育つたもんね、しようがないよ）』

夜「ちよ、本音と建て前逆になつてるよ！他人の過去だからって、雑だよ、雑！」ていうかこれ、ほんわか雑談なラヂヲのはずだから！最初の台本チックな流れどこいったの!?」

輝『それじゃあ次回の鬼呪ラヂヲは、我らがコミュ障、富岡義勇が召喚されるぞ、楽しみにしておけよ』

夜「私を無視な上、上から目線の次回予告やめなさいよ！？というか勝手に締めな」

輝『来週もまた見てくれよな、じyan、けん、ぽん！』

夜「じyan、けん、ぽんじやなあああい!!」

第五話

「やつと君を見つけたよ。来てくれて良かつた」

それは夜の最も永い日のことだつた。

当時はまだ耀哉の病はそこまで進行しておらず、軽く屋敷周りを散歩するには可能であつた。

そんな彼は、月が明るく光る時間に、屋敷と隊士達が眠る墓地との間にある大きな藤の木の根元で、彼女を待っていた。

ゆっくりと歩いてくる、赤黒い羽を持つ鴉を肩に乗せた彼女に耀哉は微笑み、言つた。

黒い刀の鞘と明るい紫の髪が月明かりを反射し、朱色の瞳をいつそう輝かせる彼女は応える。

「私をこんな山奥まで呼んだのは何故ですか？あなたは、誰ですか？この、しゃべる鴉も、なんなのですか？それに藤の木と花のにおい、私あまり好きではないのですが」

耀哉は警戒心を解かせるように、につこり微笑んで話を始めた。

「私は産屋敷耀哉。鬼殺隊九十七代目当主であり、柊 夜永、君をここへ呼んだのは、鬼殺隊に入隊してほしいからだ。この子達は鎌鴉と言つてね、とても頭がいい子達なんだよ。藤の木は鬼に対しても毒性を持っているんだ、我慢してもらうしかない。すまないね」

指に鴉を乗せ、その背をゆっくり撫でながら全ての問い合わせに耀哉は答える。

夜永^{よな}はその聲音と表情、しぐさを注意深く観察した。

そう、警戒心をもつて話を聞いていたはずだつたのだが。

「……私は、何をすればいいの？鬼殺隊というくらいなら、これまでみたいに鬼を殺せばいいのかな？」

初対面のこの人を、何故か信頼できると感じてしまった。

この人は、大丈夫。何が大丈夫かわかんないけど、なんか大丈夫な気がする。

それに、どこか暖かい、優しい雰囲気が、この人の言葉には籠もつている。

耀哉は満足そうに微笑み頷くと、

「立ち話もなんだからね、私の屋敷へ行こうか」

手を彼女に差し伸べる。

ビクッと震え、恐る恐る手を伸ばす彼女の手を取り、耀哉はゆっくりと歩き始める。

夜永はこの時、初めて人の手をとつた。

やわらかく包み込むような優しい手と彼の雰囲気は、心の底から安心できた。

母からの虐待で人を信じることをやめたはずの夜永の心を、耀哉は簡単に打ち碎いたのだ。

夜永が耀哉お館様を敬うのは、出会いの経緯と、その後の二年間によるものが大きい。

ちなみに余談だが、夜永の後見人は、産屋敷耀哉である。

屋敷へつくと、夜永は客間へ通された。

「夜永、まず君にはきちんとした呼吸を覚えてもらう。君はすでに、呼吸を使っているね？」

「呼吸つてなに…？」

知らない言葉、いや、知っている言葉なのだが、それとは違う意味だと夜永は気づく。

「呼吸は人が鬼と戦うために編み出した技術のことだよ。君は転々と場所を移しては鬼を狩っているだろう？ その時に使っているはずだ」「……この子達は本当に頭がいいんですね」

鴉を撫でて苦笑いしながら、精一杯の皮肉を込めて夜永は言つた。安心できる。安心できるんだけど、なんだろう、こう、全て見透かされてるみたいでなんかやだ。

それに気づいているのか、耀哉の表情はにこやかなまま変わらな

い。

「そうだろう？その鎌鴉は君のパートナーだよ。大事にするようにな。そうか、夜永は無意識のうちに呼吸を行っていたのか」「はい、私の心には鬼『輝夜』カガヤが棲んでるので、鬼と戦う時はいつも力を少し借りてましたから」

しかし、ここで耀哉はにこやかな表情を崩す。

耀哉の驚き100%の顔を見たのは、夜永が最初で最後だつただろう。

驚きのあまり急に立ち上がったことでめまいがしたのか、ふらふらしているところを夜永に支えられ、椅子にゆっくり腰掛けなおす。ありがとう、と耀哉は彼女に礼をし息を整える。

その後すぐに立ち上がり、書棚から本を一冊取り出すと、質問した。「心に、鬼が、いるのかい？」

そんな話は耀哉自身聞いたことがなかつた。九十七代続いてきた産屋敷家の資料にすら、そんなことは書かれていなかつた。

心に鬼を宿した人間など、存在は確認されていなかつた。

そんな思考に気づくはずもなく、夜永はあっけらかんと言ひ放つ。「え、あ、はい。覚えてはいないです、産まれた時から心にいたそうですよ、『輝夜』の話だと。この刀も、『輝夜』に借りた力の一つです」

し

鬼と共に存できている。しかもその鬼は鬼狩りのために力を貸しているという。そんなことが有り得るのか。

確かに日輪刀特有の、太陽光に長年当てられたら鉄の雰囲気はその刀からはしていない。

これは柱には共有しておくべき話題だろう。しかし、ありのままを話してはほぼ全員が、心が鬼に棲むことによるなんらかの影響を考慮し、何も起こらないうちに殺すべきだと言うだろう。だが、彼女は人を鬼から守るために戦っていた。その昔、人に味方した鬼のように。

当時の当主は彼女とその家族を救えなかつた。いつかその親族もしくは鬼側に組みしていた者が鬼殺隊に入隊した場合、どうか守つてやつてくれという思いは代々受け継がれている。

彼女の剣技は、速度こそ早いものの、型や呼吸に合わせて使われておらず、彼女のいう『輝夜』という鬼に力を借りることで鬼と戦つていたのだろう。

剣の師は必要だ。

口が堅く信任できる柱が適當だろう。
カナエに頼むのがいいかもしれない。

「夜永、あまり一般の隊士の前ではその話はしないようにね。鬼殺隊の隊士は鬼に身内を喰われたりした人もいるから。話すなら、柱になつてから、柱の人達にだけにしなさい」

「わかりました、『輝夜』の話はしないようにします。……ところでさつきから持つてるその本は、何の本ですか？すごく古そうですけど」

「この本はね、いくつも前の当主と、当時柱だった”人”が書いた書物なんだ。夜永の呼吸の師になるだろう。夜永がこれから修める、”鬼の呼吸”のね」

「”気の呼吸”?ですか?」

その本にはこうある。

鬼の呼吸とは、鬼女である鈴鹿御前が編み出した呼吸法である。

壹の型	牛鬼
弐の型	鬼女
参の型	善鬼羅刹
四の型	金鬼夜叉
伍の型	羅生門
陸の型	鈴鹿御前

以上六つの型を有し、鬼の力をより増大させるための型と、次の一撃で鬼の頸を斬る型がほとんどであり、当時は愛柱と共に闘し、その猛

威を振るつた。

この本によると、信頼できる相棒や、チームに所属する隊士にはかなり有用な呼吸法とされたが、ついぞ鬼女の鈴鹿御前の他に使える者は現れなかつたとある。

そもそもが人が編み出した呼吸法ではないため、習得が不可であるかもしれないが。

「いいかい、夜永。この本の内容は誰にも教えてはいけない。君にはこれを扱える才能があるかもしれない。今となつてはもう誰も使い手がおらず、歴史に埋もれた呼吸だけど、それでも、他の隊士に訝しまれることは避けるべきだと思う。それを忘れてはいけないよ」

それから二年かけて夜永が身に付けたのが、『鬼の呼吸^き』であり、新しく生み出された『気の呼吸^き』である。

まったく新しい呼吸であるが故に、その名には氣をつけなければならぬ。

その点については、夜永が『鬼の呼吸^き』から編み出した『気の呼吸^き』は幸運だつた。

もちろん、産屋敷家の書物には、この呼吸に関して厳重に記録されることになる。

隊士には気の呼吸内容についてのみ公表し、呼吸の出生については秘匿された。

気の呼吸

鬼の呼吸を元に、人が扱えるように呼吸の仕方を人間の肺に合わせた呼吸法である。

気の呼吸自体に強い殺傷力があるのでなく、パートナーやチームと戦闘を行うことが前提の、連携に特化した呼吸法でもある。

壱の型 牛氣

式の型 氣女

参の型 善氣羅刹

四の型 金氣夜叉

伍の型 纏

以上五つの型を有し、基本的に男性隊士に比べ、身体構造上腕力の劣る女性隊士の方が才能及び修得可能性を秘めている。

柱の名前は通常、呼吸の名称によつて決まるが、夜永は例外である。気の呼吸という、柱をつけるとなんとも語呂が悪くなつてしまふ名称のため、氣→鬼と変換して氣柱と書いて『おにばしら』と呼ばれることになつた。

鎌鴉達にとつては柱の名など、自分達が理解し、主人にきちんと情報をお伝えことができるならば何でもいいというのが総意であり、鴉によつては氣柱おにばしらだつたり鬼柱おにばしらだつたりする。

ちなみに発案者は夜永の心に鬼が棲んでいることを真に受けた胡蝶力ナ工である。

図らずも元になつた呼吸を言い当てた力ナ工に、お館様はかなりの汗をかいたそうだ。

――――――――――――――――

「氣の呼吸、壱の型・牛氣！」

模型に対して、久しぶりの愛刀を右手に身体を動かす。

牛氣（牛鬼）は踏み込みと溜めを浅くすることで、威力を引き換えに速度を重視した、「雷の呼吸・壱の型」を模した型だ。

私の場合、氣の呼吸の時は骨まで。鬼の呼吸の場合はギリギリ斬り

とばすまでの力になる。

模型の半分と少しまで斬撃が届いたことに、よしと頷く。

これで問題なしかな、腕の痛みもなくなつたし、ちゃんと動くようになったしね。

『よくこの三ヶ月、満足な運動してなかつたのに動けるね。一般人なら身体バキバキいつてる頃だと思うよ』

『すみなほきよちゃんや、力ナエさん達のおかげだよ。あ、そうだ、見てた? しのぶ姉さんが薬湯かけの訓練で私に負けたところ。顔真っ赤だつたよね!』

『その後ボコボコに負けてたけどね、夜永は』

『え、えと……そ、それはほら、私病み上がりだから!』

輝夜は、へえーと半眼で夜永を見返す。

この三ヶ月、暇で暇で仕方なかつた(元はと言えば力加減を考えなかつた自業自得)ので、鬱憤が貯まつてているのだ。

どのくらい弄つてやろうかと思案していると、誰かが近付いてくる氣配を『輝夜』は感じ取り、チッと舌打ちする。

ガラツと戸を開けてやつてきたのは、この蝶屋敷の主人である。入つてきた瞬間、目が合つた気がした。

こいつ、実は僕のことまで見えてるんじゃないかと思うほど目が合う。

「夜永、腕の調子はどうですか?」

「おかげさまで、もう十分動かせるようになりました。何故か蝶屋敷での療養期間が延びていたことについては触れないでおきますね、力ナエさん」

「あらあら、夜永は私が無理やり療養期間を延ばさせたとでも思つているのですか? ふふつ、私“だけ”のせいじゃありませんよ」だけを強調するあたり、さすが長女である。

しのぶやアオイならば、確実に誰かのせいにしてしらばつくれただろう。

「お館様から鴉が来ていたわ。報告はあなたの鴉から聞いたみたいだけど、直接口からも聞きたいことよ」

「わかりました。すぐに向かいますね。またお世話になるかもしないのでその時はよろしくお願ひしますっ」

お館様がお呼びならばと、超特急で準備しないと、猛スピードで訓練場から駆け抜けしていく夜永を見送り、ぽつりとカナエは呟く。「やつぱり、どこか他人行儀というか、距離を置かれてる感じがするのよね。……絶対いつか心からの笑顔を見せてもらうわ」

それからそれから、あの綺麗な明るい紫の髪を丁寧に手入れして、ほつぺすりすりして、満足するまで抱きしめて、添い寝して以下略。うふふふと、妖しげな笑いが訓練場に木霊した。

部屋に戻り羽織を着ようとしていた夜永は、身震いしてくしゃみをしていた。

『どうした？ 夜永、風邪か？』

『う、ううん。なんだろ、突然謎の寒気が。そだ、ありがと。もういいよ』

もういいよ、の言葉でフツと昏く紅い刀が消える。刀を携えてると走りにくいからね。

彼岸花の羽織をきちつと羽織り、蝶屋敷を出て産屋敷邸へと向かつた。